

編集後記

本会報は、前回に続いて、学術全体の動向と農学各分野の会員の皆様からそれぞれの分野における現状とそれに対する個人的見解や主張をお寄せいただいた。

#大杉副会長は、第 24 期学術会議（平成 29 年 10 月～令和 2 年 9 月）のこれまで 2 年間の取り組みの概要を述べられ、その中で第 6 期科学技術基本計画に対して、学術の多様性と持続性を保証する政策提言がなされた。また、農学関連では、農学委員会と食料科学委員会の活動として一つの報告と二つの提言がなされた。

#熊谷先生は、ご自身の日本大学における学長主導の男女共同参画活動によって女性教員の割合が飛躍的に改善されたことを報告している。また、所属する学会、学術会議などでの体験をもとに行動に移すことの大切さを述べている。人事選考以外での女性教員の立場の改善も行われていると思うが、どのようになされているか知りたいところである。

#進士先生は、福井県立大学の学長として創造農学科という新学科の立ち上げの経緯について述べている。現在、全国的に農学系の学部や学科の新設が相次いでいるが、その中において少人数であっても創造農学科を新設された意義は大きいと思われる。ご自身は、都会の大きな私立大学から地方の小さな公立大学に移られて様々な点で発想の転換を迫られているようだ。

#中谷先生は、農研機構副理事長という立場から、現在進行中の機構改革とスマート農業やスマートフードチェーンを中心とする農業研究の方向性について述べている。従来型の基礎研究も重要視しつつ、農学の範疇を飛び越えて、工学、医学などの他分野との連携することの重要性を指摘している。

#佐々木先生は、平成 27 年に策定された「食料・農業・農村基本計画」に基づいて行われた新品種の育成と普及について、大豆や大麦を具体例として挙げて説明し、併せて今後の問題点について述べている。

#筒井先生は、最近、世界各地で起こっている鳥インフルエンザ、BSE、口蹄疫、豚コレラなどの感染症によって大量の家畜が犠牲になっていることを述べている。食肉は国内だけでなく、世界的に流通し、貿易額も伸びているので、感染症対策および検疫システムの改善およびこれに関する密接な国際協力が望まれる。

#広田先生は、北海道における気象データの利用について述べている。十勝平野では冬の畑地が凍結することが必要だということを知り驚いた。気候変動に伴って降雪時期が早くなったことにより凍結深が浅くなり、それが農業上は不都合とのことである。凍結深を制御する技術開発に気象データが大きく寄与しているとのことである。今後、温暖化等の気候変動に対する作物の栽培管理にますます気象データが貴重なものになるだろう。

高山先生は、植物生態情報計測技術を活用した植物工場の現状について述べている。IoT や AI 等の技術を駆使した制御システムは今後ますます精密化され、ニーズに合わせた生産がなされていくだろう。この技術の発展は必然であるが、経営的観点からは技術に連動したどのような発展が可能であろうか。

渡部先生は、定年間際まで実験室で魚類における筋肉の低温適応メカニズムについて研究していたが、東日本大震災と原発事故による放射能汚染をきっかけにこの問題に向き合うなかで、どのように考え方や行動が変わってきたかについて自身の体験について述べている。農学研究者としての本質的なあり方を問うている。

中西先生は、学生時代はよき指導者に恵まれて本質的な問題に取り組んだが、民間企業に就職してからは応用的研究に染まっていた。たまたま農学部で職を得て、生き物の面白さにのめり込んだ。「もっと私たちは自然を知ろうとする学問を発達させてもいいのではないだろうか。」という言葉が特に印象に残った。

どの原稿も、多くの示唆に富む有益な文章であるが、一体どれだけの方が読んでくださっているかが気になる。会員はともかく、会員以外の方にも読んでいただく何らかの方策が必要だと感じた。(長澤寛道)